

イベント報告

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発掘と発信」、「伝統の進化と創造」の3つを事業の柱としています。その中から、いくつかの事業についてご報告します。

日本三大田植祭の筆頭



住吉大社 御田植神事

(国指定重要無形民俗文化財) 2022年6月14日 / 住吉大社

共催：関西・大阪21世紀協会

御田植神事は、摂政11(211)年、神功皇后が住吉大社の鎮座に際して当地に神田を定め、長門国(現在の山口県)から植女(うえめ)たちを召して御田植奉仕をさせたことに由来するといわれています。その後、植女の末裔が旧社領の堺乳守(ちもり)の遊女となり御田植奉仕を続けてきましたが、明治時代に入って御田を含む境内の土地の多くが民間に払い下げられたことで中断。これを憂えた大阪新町廓が御田を買い上げて住吉大社に寄進し、芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救いました。昭和54(1979)年に国の重要無形民俗文化財に指定され、日本三大田植祭の筆頭にもあげられています。現在は、関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会などが大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能として支援しています。



神職から早苗を受け取る植女



御稔女による「神田代舞」

今年はコロナ禍のため、時間や規模を縮小して開催し、初のライブ配信も行われました。第一本宮において、植女の早苗授受をはじめとする本殿祭に続き、神楽女(かぐらめ)の田舞や御稔女(みとしめ)による神田代舞(みとしろまい)、田植踊り、住吉踊りなどを奉納。観覧の人々は、住吉大社の神事の中でもひととき華やかな古式ゆかしい儀式に見入っていました。

北前船寄港地の日本遺産を活かす



関西北前船研究交流セミナー 高砂

2022年5月27日 / 高砂市文化保健センター、高砂神社 他

主催：関西北前船研究交流セミナー実行委員会

関西地区のかつての北前船寄港地で日本遺産に認定されている自治体が集まり、その遺産の活用と集客策を探る第3回「関西北前船研究交流セミナー」が兵庫県高砂市で開催されました。

高砂市は、かつて綿花栽培が盛んで上質な綿織物が生産されていた土地であったことから、その綿布を活用し丈夫な船の「帆」を発明した『工業松右衛門』の出身地でもあります。その帆が「北前船」をはじめ近世の舟運に飛躍的な発展をもたらしましたが、その様子は彼を主人公にした作家・玉岡かおる氏の『帆神』などで詳しく描かれています。

また、高砂はおめでたい謡(うたい)として結婚式に欠かせない謡曲『高砂』の舞台となった土地であり、発祥の地でもあります。高砂神社には屋外に能舞台が設えられ、毎秋、盛大に観月能が催されており、今も大切に伝承されています。

今回のセミナーには、実行委員会の構成団体や市民など100名余りが参加し、基調

講演として、同市教育委員会の清水一文氏が、帆布の他、港湾事業にも大きな功績を遺した工業松右衛門の足跡も辿りながら高砂の成り立ちを解説。その後、日本遺産の構成文化財であり今も残る伝統的な街並みを巡り、高砂神社の能舞台では謡曲「高砂」が披露されました。

当協会は毎回、開催市と事務局を務め、企画・構成や運営などを担当しています。

